

<今回>360回目 2024年11月18日(月)14時10分～17時 601会議室

読書は3冊目「盗まれた神話」朝日文庫版 p29 いわゆる戦後史学への批判 より

<前回>359回目(24-11-4)出席者9名

資料1)第359回(24-11-4)のまとめ(清水)

A 報告 11月9, 10日は八王子セミナーが開催された。大墨氏が企画委員の中心になり、「倭国から日本国へ」を主要テーマとして、5人の講演者と現役の古代史研究者の中村修也氏を特別講演者として、開催された。中村氏は奈良生まれ、文教大学の教授である。私は数年前に知人からパソコンで意見を伺っていたので、手元に資料はなかったが、日本書紀中心で、松下見林のような立場で、特に白村江の敗戦と以降の情勢分析をされ、金春秋の評価は良いが古田史学にとっては建設的な意見交換の場とはならなかったと思う。九州王朝説は取らず、大きな九州勢力と読み替える。磐井の乱で近畿は九州を支配下に置いた。倭の5王は日本書紀にある天皇ではないことだけははっきりと述べた。谷川氏は天文観測記事だけでなく種子、屋久との交流など、日本書紀の斉明紀以降の、天、地、泰の区分と冠位制度に2つの勢力が認められる。と述べたが、質問には浅学を出して答えなかった。新庄氏は進駐軍は大和まで来て天武まで続いたという論、大墨氏は一番わかりやすかったが郭務棕の筑紫を舞台にした外交政策を饗宴地が筑紫を出ないとの記載、670年の新羅本紀の改称問題、阿部氏は九州倭国が近畿難波に飛地の直轄地を持っていた。サチヤマたちは高麗の応援に行っていた。菅原在良上奏文なるものが取り上げられていた。善隣国宝記には郭務棕が天智に対して日本国天皇宛に、天武天皇宛に倭王宛てに文書が出されていると、2国並立を述べた。黒澤氏は何回か多元の会で意見交換をしてきていたから、ほぼ理解ができた。私としては全体に音声聞き取りにくく、事前配送原稿の中身が修正されていると聞き、発表者の意図を十分に理解できなかった。討論会の始めに大越氏の倭と日本の関係解説が一番わかりやすかった。私にとっての問題点は、郭務棕が近畿に来たか、天智に日本国王と云い、天武に倭王という善隣国宝記に信頼性が吟味されているのか。多々疑問が残るセミナーであった。(評の文字さえ一字も忘れず訂正した紀の著作者が九州倭国の存在を伺わせる資料を残すはずがない)

C 読書 p25謎にみちた2書。景行大遠征の疑問。第3の疑い、記紀間の断絶、「記」に無くて「紀」のみにある説話は近畿に伝えられた説話ではない。

1) 景行は宮崎の日向から出発している。ここは神武の出発地だ。其れなのになんの感慨もない。津田左右吉氏が既に指摘している。

2) 日向の地 古田先生は北部九州の日向を出発点と示したが、通説は宮崎の日向が出発点になった。それは当時の権力集団の一つ薩摩勢力の力と国学者たちの学閥の共同作業である。筑紫が北部九州に限定されて使われているが、この一か所だけ筑紫を九州島全体を表すように使っている。(筑紫の日向の解釈)

3) 降臨地は韓国に向かいて 古事記にある表記は北部九州の地がふさわしい表現だ。宮崎の日向では韓国岳、高千穂山となり、朝鮮半島に向かっていない。高山氏が白板で高千穂辺りの図を書いて、理解の便と当時の薩長政権の歴史に及ぼす影響の一つを現代の古代史の学問にまで及んでいることを示された。

4) ついでに高山氏から荊木美行編の「天皇系統図」が示された。全員から注文が出て、難しいコピーを取っていただいた。便利で、しかも古事記などを参考にした高山氏の書き込みがあり、益々貴重で便利になっている。

第360回 12月2日 14時10分から17時まで 603会議室

第361回 12月23日 14時10分から17時まで 602会議室